



# 珈琲診断



川崎ゆきお

「朝の珈琲で分かるんです」

「何が」

「体調がです」

「ほう」

それ以上この聞き手は聞きたくないようだ。何とかその話を引っ張りたくないのだが上手い手が浮かばない。

「朝は毎日喫茶店で珈琲を飲みます」

話を続けられてしまった。

「その喫茶店は専門店です、夕べの残り物じゃない。朝は朝で一番に入れた珈琲だ。この品質は安定しておる」

「今朝は暑かったですねえ」

「珈琲は暑いのに限る」

止められない。しかし、天気の話もしたくない。ただ、珈琲の話よりはましだ。

「その入れ立てのホットコーヒーを一口飲む。この味が美味しければ体調が良い。ただ、美味しいにも色々ある。特に珈琲は香りが大事だ。鼻だね。鼻が詰まっているときや、水ばなが出ておるときはそうはいかない」

「最近風邪を引きましたか」

「珈琲と風邪とは関係はないが、風邪の諸症状が出ておるときは、やはり味と香りで分かる。今一つ美味くない。美味しい珈琲とは、すなわち体調なんだね。ただ、これは毎朝、そのコーヒーを飲んでいないと駄目だ。同じ豆で同じ作り方のね。その専門店は私は信頼している。きっと同じものを出すことを。しかし、朝一番だよ」

風邪の話にならない。しかし、聞き手は風邪の話も、あまり聞きたくない。

「胃だね。胃が良いときは珈琲も美味しい。だからこれで胃腸のコンディションも分かる。昨夜ややこしいものを食べなかったこともね。胃は敏感だ。すぐに何か言い出す。だから、珈琲の味にも関わる。それらのことを朝の一杯の珈琲、いや、一杯分もいらぬ。一口でいい。それで分かる」

「では食事も美味しいということですね。最近何か珍しいものを食べに行かれましたか」

「食事のあとの珈琲も美味しい。しかし、これは胸焼けなどに効くので、普通のお茶でもいいのだがね。しかし洋食にはやはり珈琲だ。食後、それを飲むことで、ネチャネチャしていた口の中がすっきりする」

やはり、珈琲に持って行かれるようだ。

「あなたは、珈琲が好きなのですか」

「いや」

「好きではないと」

「いや、好きでも嫌いでもないかな」

「しかし、専門店に朝一番の入れ立てを」

「だから、体調を見るバロメーターとして飲んでおるのだ」

「要するに体調の話なのですね」

「そうだよ。珈琲の話じゃないよ」

「それで、今朝はどうでした。美味しい珈琲でしたか」

「可もなく不可もなし」

「はい」

「美味しいと油断する」

「油断」

「体調が良いときほど注意が必要なんだよ」

「はい」

「コーヒが不味いときは、その日一日気をつける。大人しくしておく。これはこれで心配でよろしくありません。だから、可もなく不可もない珈琲の味が一番だわ」

「はいはい」

了